

芭蕉百回忌追善集『風羅念仏 みちのく』について

寺島 徹

三二一

「風羅念仏」事業とは、尾張の中興期俳人である加藤暁台（一七三二—一七九二）が芭蕉百回忌取越追善法要のために行った追善事業のことであり、勸進事業、法要も含めると天明元年（一七八一）から天明三年（一七八三）にわたって行われた。本稿では、勸進事業の一つとして存在はしられていたものの、戦後、俳書そのものの行方が知れなかった『風羅念仏 みちのく』（天明二年六月成）について取り上げ、また、未紹介の書簡資料を組上にあげながら、本書の内容について紹介する。従来、不分明であった「風羅念仏」事業の行程について、新たな知見を示してみたい。

一 風羅念仏の諸本について（補説）

『風羅念仏』には、「東武の巻」、「上総下総安房の巻」「みちのくの巻」「法会の巻」などがある。はやく、伊藤東吉氏は、『俳諧大辞典』等において、「東武の巻」等の巻とともに、「みちのく」の巻が存在することを明言している。しかし、服部徳次郎氏を中心とした謄写版『暮雨巷集』（さるみの会、昭和35年）、『続暮雨巷』（同、昭和39年）に、「みちのくの巻」のみ紹介・翻刻がみられない。また、暁台研究家の清水孝之氏も、『加藤暁台 研究・鑑賞・資料』（和泉書院、平成8年）において、『俳諧大辞典』の「風羅念仏」の項（伊藤東吉執筆）によれ

ば「みちのく」（丈芝序）の一本が記載されており、当然刊行されたであろう（伝本所在不明）と述べるように、「みちのく」の巻のみ、未見であったことがうかがえる。

拙稿「芭蕉百回忌追善『風羅念仏』事業と『新幽蘭集』——曾洛の暁台顕彰活動（二）」（金城学院大学論集人文科学編14-11、平成29年9月）において風羅念仏事業の諸本、資料を整理した。その時点でも、「みちのくの巻」は、現存の俳書ひいてはその内容を確認することができなかった。しかし、その後、『新免安喜子氏寄贈連歌俳諧書目録』（京都府立大学文学部日本・中国文学科編、平成30年）の発刊において、『風羅念仏』諸本とともに、「みちのくの巻」の巻も京都府立京都学・歴史館に所蔵されることがわかった。

この目録より、書誌事項を引用しておきたい（寸法は、私に補った）。
外題、風羅念仏。半紙本一冊、袋綴。縦二二・七糎×横一五・九糎。
暁台編。二十丁。天明壬寅のとし丈芝坊序、書林、江戸室町三丁目須原屋市兵衛／京寺町松原上 辻井吉右衛門。

この本が、伊藤東吉氏が閲覧した「みちのくの巻」かどうかは、不明だが、内容が大きく異なる異版はないと推測されるため、この書（注1）により、暁台の東北行脚について考えてみたい。

二 丈芝坊白居について

『風羅念仏』『みちのくの巻』（以下『みちのく』）は、冒頭に、仙台の暮雨巷門弟として知られる丈芝坊白居（註2）の序がおかれる。まず、白居の序文を引いてみよう。

古人なしといへる翁故人となり集つくる事古今にわたるといひけるも、今ハいにしへごと、なりて今其氣つくれるハも、とせの故人を奠れる也。かの大伽藍とりよる人は一木一艸だもおろかならずとや。茲に我師暁台うし一句一行の基立て、みづから扶桑半州を蹤横し、寒餘を凌て終に三十三本の追善をとげらる。いさほしなる哉。此みちのく緑葉城辺はおほく阿叟が支流にひたれば、此時にあひてこのえらびに渴仰の力をあはすものすくなからず。師ハいへる事あり。もととき翁ほそ道にすぢりもぢりて身をよせられし時、ひと夜の下陰となりて染緒の艸鞋に志を顕せし画工嘉右衛門ハ、老人さばかりの由縁あるをのこなりとぞ。嗚呼おぼろげならず。此事其事をはじめにかいつけてふれてきこゆ。いかにせん老の筆禿れ口つきゆがみて何をかいほむ、いはざるといへる詞をのみかいしるし、白居敬して蹲る。

天明壬寅のとしみちのく仙台の

閑人丈芝坊

ここで、白居はおおよそ次のようなことを述べている。

芭蕉翁がなくなつて百年（正確には九十年程）がたち、暁台先生は、その追善のため、全国の半分にわたる国々を縦横に行き来し、星霜にたえながら、三十三本の追善をなした。仙台は、多くが師の支流にあたるので、この時宜にに応じて力を合わせるものが多く存在した。奥の細道の旅で芭蕉翁に染緒の草鞋をわたした画工嘉右衛門は、白居所縁の者である。ここに老人の私がかえて筆をとつた、というので

ある。

『みちのく』が白居の暁台への全面的な協力によりなつた俳書であることが理解できる。

なお、丈芝坊白居が画工嘉右衛門の息であることについては、かつて子息説、反対説が入り乱れていた。その後、岡本勝氏『おくのほそ道』後日（『近世俳壇史新攷』（桜楓社・昭和63年）所収）は、子息説、反対説を詳しくまとめ、養父関係の可能性も含めた画工嘉右衛門の息とするのが有力と位置づけている。序文では、「さばかりの由縁あるをのこなり」とあり、やや微妙な表現ではある。

暁台と丈芝坊白居の関係について、少しだけ整理しておこう。服部徳次郎氏『暮雨巷暁台の門人』の「丈芝坊白居」の項、そして、清水孝之氏『加藤暁台』（和泉書院）などに、丈芝と暁台の関係の大枠は素描されている。^{註3}それによれば、明和七年の暁台の東北行脚のうちに、丈芝は、仙台において、献身的に暁台をもてなした。それは、安永二年から三年の丈芝の来名につながり、丈芝が安永三年の蕪村と暁台一派の上方交流の折にも、少なからぬ役割を果たしたことがうかがえる。ここでは、近年、新たに目にした資料により、暁台と丈芝坊白居の関係を補足しておこう。東海市横須賀町の白羽泰氏がご所蔵の俳諧資料の中に、暁台と丈芝の関係を示す二つの資料がある。^{註4}

一つ目は、安永二年冬と目される「暮雨巷左右句合」という摺物である。その左隻の一枚には、暁台の尾張の高弟にまじつて、「忘れ花」の番いとして

わすれ花咲しやとみれば咲にけり

丈芝

忘れ花糞虫も身のなきやらん

騏六

という丈芝の句が見える。これは、同年初冬四日付逸漁宛書簡（綿屋文庫蔵）に見えるものである。この刷物は、暮雨巷が当時よく行った句合の成果を示すものと思われ、暮雨巷高弟の中で、丈芝も存在感を

示していることが確認できる。

二つ目として、安永三年の「客中元旦」という一枚刷をあげよう。戦前に紹介があるものの、現在、行方が確認されていないものである。^(註6)これも丈芝のものを引いておこう。

又ひと、せのたくみとても身を風葉の筆記なりとすべきわざ
すなり

一字書て我事はじめ済したり

仙台丈芝

(中略)

寒夜桂葉下の茶に酔て

狗樟ほとぼりに鼻さし合せつ、

冬の情月明らかに霰降る

暁台

河原おもての鴨さハぐ宵

白図

この里に城の大鐘鏝おろして

丈芝

暁台一門の中で丈芝の位置がいかに高いものであったかがえよう。白羽家資料には、こうした暁台、丈芝関係の一枚刷が四点みられ、^(註6)明和期から安永三年にかけての暁台と丈芝の関係が深いものであったことが、あらためて確認されるのである。この関係は、丈芝が、名古屋から仙台に帰るにあたり、薙髪して白居となった後、安永中、後期から風羅念仏事業の天明二年にかけても変わらず続いていく。

三 『風羅念仏 みちのく』の行程

それでは、風羅念仏『みちのく』の旅の行程は、どのようなものであったのだろうか。

『尾三古俳書解題』の清水孝之氏稿には「関東・東北への勧進の旅は、前後二度にわたって行われ、諸家との芭蕉発句脇起し歌仙は、現存七冊分で二十八巻を数え、天明二年秋冬には、陸奥・会津・越後を

経、師走も迫って名古屋へ帰った」(二六三頁)とある。

ただし、先に述べたように、伊藤東吉氏が瞥見していた『みちのく』を、清水氏は未見であり、いかに「陸奥・会津・越後を経」たのかは、これまで明らかにされてこなかった。伊藤氏も、『俳諧大辞典』と『暁台年譜』に簡略に言及するのみで、『みちのく』の内容は、ほとんど明らかにされてこなかったのである。そして、戦後、伝本もこれまで、所在不明であった。まず、『みちのく』の構成を示そう。

丈芝坊白居序

「菖蒲の巻」歌仙行(芭蕉・白居・暁台ら一巡一句)

四時之吟 松島風星菴連中・野蒜砂屋菴連中・仙府瓠形菴連中

暁台発句二句(瑞巖寺、松島)

「医王寺の巻」歌仙行(芭蕉・蘭岬・暁台ら十吟)

四時之吟 信夫福嶋鯛菴連中・安達小浜連中・江刺岩谷菴連中

暁台発句二句(旅懐・帰路)

他の『東武』各編および『上総下総安房』と、ほぼ近い構成となっている。あくまで、歌仙を中心とした勧進が中心であり、その前後に現地の四時吟がおかれている。そのため、本書のみから、暁台の行程を理解することは難しい。

だが、近年、この時期の暁台の動向を示す月次連中宛の暁台書簡(宇佐見早苗氏所蔵)の写真を目にする事ができた(画像は、岐阜市にある長良川画廊の岡田晋氏のご提供による)。本文を紹介してみよう。

文月六日会津を経て越之／新潟へ出申候。益後迄爰ニ／留杖白根へうつり夫内与板／出雲崎、柏崎、右之外水原と／申所へ参る事も可有力。不定／随分残暑之障も無御坐／経国御平意可被下

候。尚又如是／可申入候。以上

盆十六日

五月のはじめ爰をくだりて／今文月一日

帰り来れば浅香のわさ田穂に見ゆる

狭間道

をみなへし危き崖のひたひ哉

萩原や花とよれ行瓜ざかり

客中盆会

かくてあれば我も古郷の魂の数

海士の子や何はなくても盆扇

まくり手がをどり崩して踊けり

七夕は長篇之文章アリテ

星むかへ新潟舟に鼓うて

夏之分少々書申候

あだ花となりて美し瓜ばたけ

火とり虫又灯とほして放ちけり

火に躍る夜狩の魚の泪見よ

よろ／＼と昼がほ涼し茅がうら

月次

御連中様

暁台

以上が、書簡の内容である。天明二年の七月十六日のものと考えられる。書簡のあらましを述べてみよう。

七月六日会津を経て、越後新潟へ出た。盆の後まで、しばらく引きとどまり、白根へうつり、それから、与板へ行き、出雲崎、柏崎を経

て水原にも行く予定である。残暑の差し障りもないため、社中のみなさんにおいては、どうぞご安心いただきたい、というものである。そして、道中の句が十一句書き留められる。

まず、それぞれわかる範囲で出典を示してみよう。^(註7)

1 帰り来れば浅香のわさ田穂に見ゆる ※句集 句巢(岡崎本) 597

曰人暮雨句集 みちのく

諷詠集(寛政十年)

2 をみなへし危き崖のひたひ哉

※句集 句巢(岡崎本) 633

曰人暮雨句集 谷沢本

3 萩原や花とよれ行瓜ざかり ※句集 句巢(岡崎本) 578

曰人暮雨句集 三傑集 442

4 かくてあれば我も古郷の魂の数 ※未詳

5 海士の子や何はなくても盆扇 ※句集 句巢(岡崎本) 594

6 まくり手がをどり崩して踊けり ※句集 句巢(岡崎本) 595

谷沢本 三傑集

7 星むかへ新潟舟に鼓うて ※未詳

8 あだ花となりて美し瓜ばたけ ※未詳

9 火とり虫又灯とほして放ちけり ※曰人暮雨句集

10 火に躍る夜狩の魚の泪見よ ※未詳

11 よろ／＼と昼がほ涼し茅がうら ※未詳

1は、本稿で取り上げた『みちのく』の巻軸に見える発句である。『みちのく』には、前書に「帰路」とあるが、書簡の1の前書の「五月のはじめ爰をくだりて今文月一日」という文言より、行きの五月に浅香を通り、宮城野を一遊したあと、帰路にまた、この場所を訪れたことが書簡からも確認でき、この書簡が『みちのく』の折のものであること

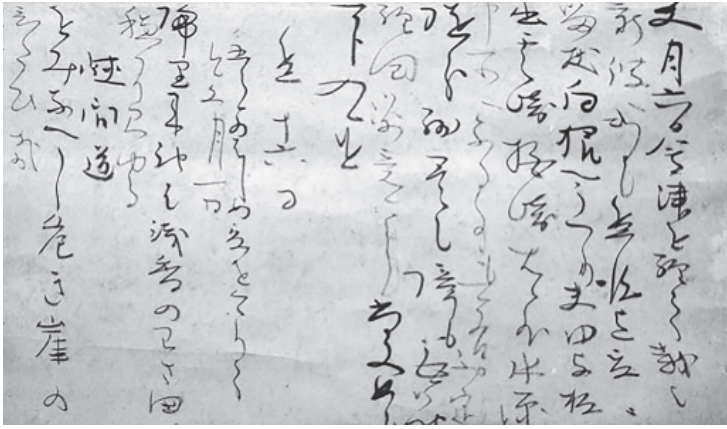


図 晧台書簡 月次連中宛 盆十六日付 (宇佐見早苗氏所蔵)

とが推定できる。暮雨巷句巢(岡崎本)の位置からも、この時期とみてよいであろう。また、落款の筆致も、晩年の真筆によくみられるもので、晧台が晩年にさしかかる天明二年のものともみて矛盾は無い。書簡の句をみると、『晧台句集』および『暮雨巷句巢』に載る句がある一方で、盆の句は、4、7ともに未収載のもの。8、11も、9が陸奥にゆかりの深い『暮雨句集』に見えるもの、他書に未収載となっている。これらは、4にみられるように、挨拶性、当座性の強い句も少なくないことによるものか。

宛先の「月次御連中」は、尾張で留守を守る暮雨巷連中とみるのが妥当であろうが、八月に伊勢の逸漁のところに寄っているため、そちらの可能性もある。

ともあれ、この書簡の出現により、晧台が、五月初めに浅香に寄り、そこから仙台に向かったこと、仙台には、五月、六月と杖を曳いたとおぼしく、七月一日には、再び、浅香を通過したこと、その後、七月六日に、新潟に着き、盆までとどまり、その後、白根へうつり、与板、出雲崎、柏崎、水原を経由する予定であったことがわかる。

清水孝之氏が、先の「晧台秀句鑑賞」(『加藤晧台—研究・資料』に再録)の中で、「経路の詳細な跡づけは不可能に近い」とされるように、風羅念仏の東武、東北の動向は、江戸を起点としたあわたましい動きのなかで、跡付けすることが非常に難しかった。しかし、この書簡の出現と、再出現の俳書『みちのく』を合わせみることによって、晧台の天明二年の勸進行脚の行程のアウトラインがだいぶはっきりしてくる。清水氏は、同稿で、

なお「みちのくの巻」とも関連する問題だが、「晧台年譜」には、天明二年「九月、二たび陸奥白川を越ゆ」として「紅葉散髪かれて我にけふもあり」の一句が、遺草によつて引かれた(『句集』に前書なく句形に小異あり)。「二たび」とされたのは遺草に詞書があつてのことか、単なる推定によるものか、不明。拙論によれば、天明二年夏秋の交、房総旅行以前に奥州へ赴いた形跡は認められず、可能性は寧ろ天明元秋にあるうか。

とのべ、晧台の東北行脚が、天明元秋、天明二年晩秋に行われたと推測されている。だが、本書簡の出現により、天明二年夏秋の東北行脚があつたことが確認できるのである。まとめるならば、晧台は、江戸を根城にしなから、

江戸(天明元秋秋冬、同二年春) ↓ 奥州(同二年五月〜七月) ↓ 北越(同二年七月) ↓ 帰庵・伊勢(同二年八月) ↓ 江戸・房総・奥州・越路(同二年九月以降) という行程をたどったものと考えられる。

四 『風羅念仏 みちのく』の内容

つぎに、『みちのく』の構成と内容についてみていきたい。文芝坊白居の序につづいて、「菖蒲の巻」が置かれる。先に引いた『暮雨巷集』『統暮雨巷集』にも、翻刻がないため、すべて示してみよう。

歌仙行

あやめぐさ足にむすばん草鞋の緒
 かくやと払ふ曙の蚊の齧
 土甘くあら小田ひらく松茹て
 火を焚あたり腥きなり
 もと船へ水売荷ふ有明に
 風つやくと露の上ふく
 紅葉の賀遥に警固つかまつり
 うすむらさきに思ひかよハす
 此寺のあハれ告よや山鴉
 兀うせてけり雪舟が馬
 湿気降の雲吹切て其ゆふべ
 星川堤合歎にさす月
 手やむなくすごとく戻る骨牌打
 もとの女房が見ぬふりを見て
 古哥の蛙鳴なり裏御門
 水とまりて蓴生そむ
 花守が手嶋塵織もどかしや
 又塩壳と浄土あらそひ
 烟とも雨ともわかぬあめの降
 鶏なくかたへ舟ハよせたり
 犬神をつかふと聞も此あたり
 菊池に夫の恨のこりし
 黒髪をつかみ上たる夢覚て
 岐阜のお山にあからひく雲
 水汲の声しわがれし川霧に
 粟の中道さぶらひを避

芭蕉翁
 白居
 晁台
 百馬
 投雲
 橋三
 舞双
 買我
 秋也
 化来
 万節
 虹梁
 嶺五
 艸洲
 東肆
 承鼓
 楽巾
 故的
 祇目
 砂斛
 先游
 主梅
 不国
 橋十
 渡之流
 峰羽
 岩明

菩提所の鐘撞たてる宵月夜
 斗盞疾かれと袖を引つ、
 帟御前が泪見せぬハ猶あハれ
 むすぶも苦し太刀の佩とり
 上の瀬ハ石高く下ハ水広き
 うるかといへる腸を塩にす
 御師方の心いそぎを夜とめして
 曇るを春の名残なるらし
 其ひかりや堆き花百樹
 草芳しきほそみちの吟

芭蕉句の脇起こしであり、白居の脇につづき、晁台は、第三を付けている。晁台の参加はこれのみで、他は、仙台連中の一人一句となっている。この巻は、奉財のため、あらかじめ晁台から依頼され、白居を中心とする仙台の連中によって巻かれたものとも考えられるが、脇でなく、第三を詠んでいることから、表あたりまで同座した可能性も否定できない。^{注5)}

この巻につづき、「四時之吟」の発句として、巻の一巡でみられた仙台の諸連中の四季発句吟が載る。順にみていこう。まず、松島風星菴連中の発句からはじまる。

紅梅や月になる夜の去がたき
 雪降や細く掃道はきもどり
 立去て柳のおもてながめけり
 鳴飢て鳥に組つくあらし哉
 冬の月梢にそふてあらハる、
 柚の匂ひありて台の月見哉
 けふの月江に落る鷹のくもり哉

萬寸
 坡芦
 雄渚
 晋車
 李明
 丹杏
 莫故
 梨冠
 仰宮
 執筆

仙府連中

百馬
 投雲
 橋三
 岱尾

蚤に狂ひ身を嚼犬の哀也

買我

以下、奥人、萬郎、舞双、卯雪、渭石、湛水、人旨、虹梁らの発句がみえる。つづいて野蒜砂屋菴連中である。

鼠尾花の散あと暑き野中哉

嶺五

松しまのいほ寝

風の星をりく菴に入夜かな

楽巾

植田水蟹の穴よりもる、哉

東肆

以下、守桐、冢鼓、午網の故的、艸洲が続く。つぎに登米連中の

牧原や此道たてる花す、き

發榮 祇目

春雨に垣のむすびめほどけけり

同 砂斛

花による身を嵐かな秋の蝶

同 橘十

の発句がつづく。そして石巻連中として、

山遠く雨なす春のゆべ哉

石巻 不国

衣かるく卯月の雨にうたれけり

角力とりづらりとならぶ船場哉

鴨なくや火影うすらく原屋敷

以下、玉梅、東野、仙木、白扇の発句がそれぞれ三句ずつ続く。雪後、

半輪の発句をはさみ、渡之波の

名月や算へおほせる峯の松

渡之波 峯羽

おもしろきながら野菊のあはれ也

岩明

の発句がみえる。つぎに、仙府瓠形菴連中が、倪宮、萬寸、坡芦、雄

淵、莫故と、それぞれ三句ずつ掲げられる。倪宮と雄淵のものを代表

してあげておこう。雄淵は白居の弟子。のちに瓠形菴をつぐ。士朗と

も親しく交わる。

畑中につれなく花の老木かな

倪宮

夕立の晴きつて降小雨哉

よわき日の影くるひけり秋の風

古沢や春と、のふて芦の角

雄淵

昼がほに降しきる雨の白き哉
ふゆ貞の壁に蜻蛉のひかり哉

このあと、為梁、東有、完山、哥憐、陌頭の発句がみられる。水沢の

一通、桑針の榎木、仙台の五城房の句に続き、前半の締めとして、白

居が、

うぐひすにあるじぶりして飛れたり

風星菴 白居

湖辺に馬をとめて

青あらし瀬田一方へ吹落ぬ

道欠て水流れつ、むらを花

山居

気色たえて紙衣に星のひかり哉

と四季発句四句を置く。前半の巻軸部におかれるのは、暁台の次の二

句である。

瑞巖寺の方丈に入て

花橘仏子いく世に香をふれし

暁台

風星菴にとまること

十有五日

松しまや果はかなしくゆふ眺

全

瑞巖寺を回ったこと、白居の松島風星庵に、十五日程度滞在したこと

が知れる。「花橘」句は、『日人暮雨句集』、谷沢本『暁台句集』など、陸奥ゆ

かりの限られた書にしか見えない句である。「松しまや」句も、『せみ

つか(諷詠集)』、(寛政十年)『さるをかぜ』(文化元年)、『日人暮雨

句集』、谷沢本『暁台句集』など、陸奥ゆかりの本にみえる(ただし、

後の『続俳家奇人談』にも採られている)。これらの傾向は、暁台が

当地に実際に足を運び、詠んだことを裏づけていよう。

前半をみてくると、冒頭の脇起こしの巻の連中が順に、四季発句を詠んでいることがわかる。白居が各連中に発句と連句への一巡参加を呼びかけてなったものであることが理解される。続いて、後半をみてみよう。まず、「医王寺の巻」をすべて引いてみよう。

歌仙行

笈も太刀も五月に飾れ昏のほり
門戸にくらくかんごどり立
むら雨に百服茶の湯はじむらむ
筆とり筆を置わすれけり
日暮れバ桂の花を袖にをり
露になえたる細糸ほしかも
西の京今ハむかしの寺の秋
双六打の小銭わびつゝ、
明近く女いさかひさゝへかね
馬引かけし雨の赤坂
庭雀立あがりてハ輪に下りて
琴爪なげるさまのあとなき
夢解かそら言告る宵の月
水衣やゝ寒げなる顔
霧くさき岩の欠道寂として
柳のほそ葉の雫とくくゝ
朝ひより花の名残のかけ簾
三日啼せて逃すうぐひす
酒一斗井手の蛙と代にけり
帰さとゝめて松明をゆふ

芭蕉翁 蘭峨 暁台 松祖 芻古 敲雲 呉丈 馬彌 三保 古 祖 台 峨 文 雲 保 彌 祖 南楚 菊明

山姥の夜ハむなしき谷の声
疱瘡病しなん草むらの中
陽炎のきらゝ麦の苜蓿盛
高麗に軍ハ初りしとや
金売が分前かたる宿の主
頭巾のしめる浦の汐風
おほかた八十夜に一夜の秋の月
胡鬼の実とりに法師伴ふ
八朔に梅なき里のはや寒し
鏡ひとつに立かはり見る
ものねたき心を謎にかけられて
きのふは昨日風の白罌粟
須磨の里に十貫の家買出し
こゝろもとなき療治也けり
燭ありゝ高きに花の影のぼる
松のおぼろを唱ふ同音

台 峨 古 祖 丈 明 楚 峨 古 祖 丈 明 楚 彌 明 保 雲 文 祖 彌 保 楚

芭蕉の脇起し歌仙をもとに、信夫の蘭峨の脇、暁台の第三が付けられる。十吟歌仙で、暁台も、初折までは、一座していた様子もうかがえる。訪問時に一座したものであろう。
歌仙につづいて、「四時之吟」として、蘭峨・程々ら信夫福嶋蝸菴連中の発句がみえる。一部を示そう。

散さくら寒うなるまでまとみけり
朝がほに雨一時のいのち哉
(中略)
露の玉ちるを名のミヤ信夫摺
をしの雌の石ともならで鳴夜哉

蘭峨 楚江 三保

五月雨や机上に我をかへりミル

目に見えぬうちを袖の花の盛哉

敲雲

他には、松祖、芹路(女)、菊雨、南楚、呉丈、馬弼の句が続く。

春の風鶴の塹にはふかな

馬弼

ひと、せ洛東にあそびし夏日をおもひ出て

おもひ出す若葉の艶や下涼ミ

秋日和瀬ごしの魚のひかり哉

瀬之上連中の句として、岡席、宇翼、寿耳、豆苗、文席、岩明の発句がみえる。掛田の破甌の発句に続いて、瀬之上の呑溟の句が載る。

おもひかへて盗人恋すしぐる、夜

呑溟

呑溟は、福島(注10)の行脚俳人。明和期から暁台とは昵懇であった。とくに、『二編しをり萩』の旅で、深い絆が結ばれ、その後も交流はつづいている。

次に、塩田冥々を中心とする本宮連中の発句が置かれる。

西宮春怨

本宮連中

花ちる夜おとろへそめしけハひ哉

冥々

元結に霜や置らむ後の月

春の月汀にかぶ貝あらむ

大阿

すゞしさや燭の火影の簾ごし

秋の夜の松に更行離宮哉

鯉買ハゞ女に顔や見られなん

ほそくくと雪降つたふ寛かな

不言

これ以下、雨鹿、一洞、春潮、兎哉、秋夫らの発句が続く。

冥々は、別号、九淵斎(注11)

暁台は、このおり冥々に会っていたものか、

文音で句を寄せたものかは判然としないが、呑溟を通して句を寄せたとみるのが妥当であろう。冥々は、暁台の『佐渡日記』を所蔵していた(年次不詳・田中月歩宛塩田量平書簡『俳人塩田冥々一人と作品』

所収)こと、『粟時集』に暁台句を多くとっていることからわかる

ように、暁台を敬慕していたようだ。天明中頃白雄に師事して、とく

に、寛政、化政期に活躍する。この翌年、天明三年には呑溟の紹介で

冥々は百明に会っている(『奥往来』)。

つぎに、安達小浜連中の発句が続く。

牛牽の目遣ひ黒し橋の雪

蘭明

裸子の機嫌にあそぶ団扇哉

未圭

山吹や岩にくだける水の音

花明

なま酔のよごれて来たり春雪

洗柳

草の名も七いろ八いろ雪解哉

菊露

などである。つづいて、浅香の露秀の句がみえる。

虻の声蝶の夢さむほどぞかし

露秀

暁台との関係でいえば、寛政十年の『蟬塚集』(諷詠集)には、つ

ぎのように発句と詞書がある。

帰来れば浅香の早田穂に出る

尾陽 暁台

こは草庵に二たび遊囊をとゞめし俳諧の始にして岩手信夫の

道ぶりもおかしかりしが、雄じまの一句は「松しまや果はか

なく夕眺」てふ季も入らぬ詞ありしとおほめきて聞へし。

此人細道のたどりも三度なりし。後ハ越路にも契あればとて

冬空の冷き頃、会津ね越て別れしか。「人として雪に巢作る

類かな」と聞えたるぞ名残なりし。

これによれば暁台が露秀の草庵に、二度立ち寄っていたことがわかる。

松島での吟に対する批評や、細道行脚の記述もみえる。越路は、安永

四年の旅以降の暁台所縁の地である。会津を経て越路へ行く暁台の動

向も記される。冬に会津に別れて越路に向かっていることは、今回の

『みちのく』の折とは季節が合わず、天明二年の冬である(付記、参照)。

露秀は、冥々の長兄で、不狐園。通称佐渡屋文右衛門。ともあれ、

露秀・冥々と暁台の交流を裏づけるものといえよう。

これに続き、江刺岩谷巻連中の発句群がみえる。

暁となりて常ありおぼろ月

杜曉

誰をまつ橋ともあらでほと、ぎす

蟾螂の石にむかふや秋のかぜ

うつぶしにしバシ霜夜の枕哉

この四季発句に続き、白帟、蝶車、蝶羅、富仙、麦明、五童、蝶屋、

車來の発句がみえる。なかでも、野卿、白暁、白明は、杜暁同様、春

夏秋冬の句が四句とられ、江刺に重きをなしていた俳人と思われる。

それぞれ、頭の春の一句のみあげておこう。

梅さくや埃吹こむあくた川

野卿

日の筋の横たふ春の川辺哉

白暁

春雨に小高き杉のくろきかな

白明

これに続くのが、暁台の巻軸句である。

旅懐

蛸の啼はつらく故郷思ふ

暁台

帰路

かへりくれバ浅香のわさ田穂に見ゆる

全

「蛸の」句は『暁台句集』『暮雨巷句集』『暮雨句集』（日人編）に見える句。「かへりくれバ」は、第二節で考証した書簡収載の句である。『暮雨巷句集』（岡崎本）で、「蛸の」は、六〇九、「かへりくれバ」句は、五九四と配列が近い。いずれも、天明二年、奥州の帰路の秋に出来たものと考えてよいだろう。

*

最後に、『みちのく』の内容を概括的にみておこう。『しおり萩』『二篇しをり萩』は、同じ東北行脚の書でも、芭蕉の『おくのほそ道』へ

の追慕を色濃く投影した書であった。それに比較して、『みちのく』は、『風羅念仏』の「東武編」各種、「上総下総安房」編と同様、勧進の連句を主体に、四季発句を並べる形式であり、紀行文を意識した『送別しおり萩』『二編しをり萩』とは、構成が大きくことなっていた。

しかし、一方で、『菖蒲の巻』には、

あやめぐさ足にむすばん草鞋の緒

芭蕉翁

かくやと払ふ曙の蚊の背

白居

土甘くあら小田ひらく松荊て

暁台

のごとく、芭蕉の立句に、『おくのほそ道』の仙台の章の句がとられていることは注目されよう。周知のように「画工嘉右衛門」ゆかりの発句である。

紺の染緒をつけた草鞋二足を饞にくれた画工嘉右衛門への芭蕉の挨拶句に対して、序にもみた画工嘉右衛門ゆかりの白居が、脇句で答えるという趣向にもなっている。この発句をもとにした歌仙を巻頭におくことは、この試みの当初より、企図されていたことであろう。

「医王寺の巻」も、同様の趣向がみえる。

笈も太刀も五月に飾れ昏のほり

芭蕉翁

門戸にくらくかんこどり立

蘭峨

むら雨に百服茶の湯はじむらむ

暁台

飯坂の医王寺ゆかりの芭蕉発句を立句とし、福島連中と一座したものである。当座性ということを考慮すれば、この歌仙は、行きの五月頭に作ったことになろう。

拙稿「芭蕉百回忌追善「風羅念仏」事業と『新幽蘭集』―曾洛の暁台顕彰活動（二）（既出）で述べたように、『新幽蘭集』をみると、暁台は、連句の勧進にあたって、あらかじめ、芭蕉の立句と自らの脇句のセットを勧進先へ送っていた節がある。そのため、他の地域の歌仙は、芭蕉の立句が当地にあっていないこともみられた。おそらく、

そのような地域的な所縁よりも、当季にあった立句と脇のセットを用いたことも多かったのではないか。しかし、『みちのく』は、当地にふさわしい巻が的確に配置され、白居と暁台の東北行脚への強い意識の一端がうかがえるのである。

注

1 「東武の巻」には、版本により、綴じの順序の錯簡がしばしばみられる。ただし、内容上の異同はみられない。『みちのく』も内容上の異版のある可能性は低いと考えられる。

2 丈芝坊白居については、安永三年夏の薙髪以前は、丈芝とし、薙髪後は、白居と表記する。

3 拙稿「安永前期における暁台の伊勢行について―丈芝坊白居と逸漁の交流を通して―」（東海近世20号、平成24年7月）に逸漁宛書簡をもとに、丈芝の暮雨巷における動向について論じた。

4 横須賀町白羽家には、楓京ゆかりの俳諧資料が多く残されている。

5 戦前の小倉博氏「丈芝坊白居」（『仙台郷土研究』4巻11号）等に同資料の引用がみえる。

6 これらの一枚刷り、摺物については、別稿で紹介予定である。

7 出典の略号は次のとおりである。

句集―『暁台句集』（臥史編、文化六年刊）、『暮雨巷句集』（岡崎本）
―岡崎市中央図書館蔵写本、谷沢本―谷澤本『暁台句集』架蔵写本。
三傑集―『発句三傑集』（寛政六年、車蓋編）、暮雨句集―『暮雨句集』（国会図書館蔵）。

8 「月次連中」宛としたものは、例が少ない。年代の近いもので、「社中御一統」宛としたものとして、『花のしるべ』にまつわる暁台書簡（天明二年、岡本勝氏旧蔵）がある。

9 「菖蒲の巻」「医王寺の巻」を比べると、前者は、初裏の月の出所が六句目、後者は七句目である。満田達夫氏「蕪村と暁台―その連句作法をめぐる―」（連歌俳諧研究66号、昭和59年1月）に、暁台は、七句目を遵守する傾向が指摘される。ここでも、一座したかどうかの影響がみてとれるかもしれない。

10 前引、清水孝之氏『加藤暁台研究・鑑賞・資料』の第一章第四節、「暁台の東北行脚―二編 しをり萩―について」に詳しい。

11 冥々については、矢羽勝幸・二村博氏編著『俳人塩田冥々―人と作品』（象山社、平成15年）に詳しい。

「付記」本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C）課題番号17K02471）による成果の一部である。暁台書簡の内容紹介をご許可いただいた宇佐見早苗氏、写真画像をご提供いただいた長良川画廊岡田晋氏に深謝申し上げたい。

なお、校正中に、元仙台市博物館館長東海林恒英氏から岩手県一関市の旧家に『風羅念仏 みちのく』の巻三の一書が存在することをご教示いただいた。本校紹介の俳書が巻一に相当し、巻二、巻三の存在が、新たに浮かび上がったわけである。後考を俟ちたい。